

Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや！ 広島城



No.57



67年前の「広島城天守」

(このコラムの画像は小川秀樹さん提供)
仮設天守を天守台と比較すると、その周りに空間があって人々が歩いており、元の天守より小ぶりなのが分かります。高さも58尺(約17.6m)と、現在の天守の第四層くらいまでの高さしかありませんでした。

◆感謝！還暦

今年の3月に、広島城天守再建60周年、そして6月には博物館施設としての「広島城郷土館」開館60周年を迎えました。これを記念し、開館記念日の6月1日～9月2日まで、天守再建60周年記念展「感謝・還暦！広島城～よみがえった城」を開催しました。

還暦を迎えた節目の年ということもあり、広島市の広報紙「市民と市政」5月15日号にも1面で大きく取り上げていただけたのですが、ここから、私たち広島城職員にとって、新しい出会いが始まったのでした。

◆「広島城の動画をお持ちの方がいます」

展示準備も大詰めの5月下旬、展示解説書の最終校正にかかっていた頃でした。中国新聞社の記者さんから「広島城の映った動画をお持ちの市民の方がいらっしゃいます。」との情報提供がありました。その記者さんには広島城までご足労いただき、まずは動画を拝見することになりました。

この度の展示では、昭和33年(1958)の「広島復興大博覧会」の会場風景を撮影したカラー動画を、広島平和記念資料館から提供いただいて上映することにしていました。テレビでご覧に

なった方もおられると思いますが、鮮やかな色彩で、会場となった広島城天守や平和記念資料館、平和大通りなどが映されています。

ところが、今回お話のあった映像は、それよりさらに7年前、昭和26年(1951)の「体育文化博覧会」の時のものだというのです。職員の誰も見たことがありません。何が映っているのか？ 私たちの期待は高まりました。

◆走る！スイッチバックレールウェイ

広島城跡を会場に開かれた、「体育文化博覧会」の写真は、これまでも何点か紹介されています。有名なものは、通称二代目天守(以下、仮設天守)をバックに、ローラーコースターに乗っている人々を撮ったものです。この乗り物はスイッチバックレールウェイと呼ばれ、「スリルあふれる」アトラクションとして人気を博していたことが知られています。スイッチバックレールウェイの乗り場や軌道については、「しろうや！広島城No.50」において検証しましたが、残されているのは静止画の写真ばかり。まさか走っているスイッチバックレールウェイを見ることがあるとは、思いもよりませんでしたので、初めてこの動画を見たときは、思わず歓声を上げてしまいました。「走ってる！ スwitchバックレールウェイが動いている！」

◆映像を撮影されたのは

さっそく、中国新聞社の方に映像をお持ちの方をご紹介いただきました。

映像の中で、1歳くらいのかわいらしい男の



仮設天守の東側から出発するスイッチバックレールウェイ。どうやらモーターではなく、軌道の高低差を利用して走っていたようで、最後尾から勢いよく押しつけて飛び乗る係員と思われる人も見えます。軌道は、天守台の石垣からみて、高いところで地上10mくらいはあったでしょうか。展示施設の建物のそばを通りながら、本丸上段を回っていたようです。

子が、本丸下段の広場を走っています。「これが僕です」と、提供者の小川秀樹さん。ご家族で「体育文化博覧会」の会場を訪れた時の様子を、当時広島県庁にお勤めだったお父様の勇一さんが16ミリフィルムで撮影されたものです。

小川さんは、この映像が再建された広島城のものだろうとは思いつつも、何か違和感を覚えておられました。それが、前述の「市民と市政」の特集を見て、昭和26年に仮設天守があったということを知り、腑に落ちたのだそうです。

◆映された広島城内の会場の様子

二の丸南側に設けられた橋を渡って「体育文化博覧会」のゲートをくぐり、本丸手前の受付から会場に入っていきます。今と違って天守台の周りには大きな木が無いので、天守台その他の石垣の様子がよく見え、石の形や積み方の違いがよく分かります。そびえ立つのは小ぶりながらも立派な五層の仮設天守で、台風でもびくともせず、後に天守の復元を促すきっかけになりました。天守の内部がどのようなものかは、残念ながら不明です。会場には様々な展示館、滑り台やブランコなどの遊具があり、前年の「こども博覧会」でも人気を博した象の広子さんを、柵一つ隔てて大勢の人が熱心に見入っている様子も見ることができます。子どもたちは、戦争中には動物園も楽しいイベントも経験できなかったことでしょうか、博覧会はわくわくする催しだったことなのでしょう。映像の最後には、福屋百貨店の上の鯉のぼりが映されていることから、会期中の5月の連休頃の様子だったようです。

◆終わりに

城内の様子については、今後も映像の分析をしていきたいと思いますが、仮設天守をはじめとする「体育文化博覧会」の建物もりっぱで、象の広子さんやスイッチバックレールウェイなど、心浮き立つ催し物があり、入場者の人たちの明るく楽しげな表情がとても印象的です。戦後まだ6年しかたっていない時期の映像ですが、復興途上の広島市民のエネルギーが感じられました。

(前野やよい)

天守南側入口の屋根付き通路今昔物語

広島城の天守は昭和33年(1958)に、鉄筋コンクリートで再建されました。しかし、60年が経過すると、劣化は避けられず、屋根瓦を固定するモルタルや外壁の漆喰のはく落が見つかりました。そこで万一の落下の危険性に備え、市役所と協議を重ねた結果、昨年(2017)8月から、天守南側の入口に仮設屋根の設置、天守台の真下を立入禁止にする等の措置を講じてきました。

「何はともあれ安全第一!」。まずは、当面の応急処置として簡素な仮設屋根を設営し、平成30年7月2日に、より強固な構造で、最低限、城の景観を配慮した和風の屋根付き通路と、落下の危険性があるエリアへの立ち入りを制限する竹垣が完成しました。

天守の前に張り出したおよそ13mの通路は、決して築城当時の姿ではなく、最初は違和感があったのですが、日が経つにつれ、次第に見慣れてなじんできました。しかも、猛暑の毎日でしたから、入口で観覧券購入を待つお客様には、願ってもない日除け屋根となりました。



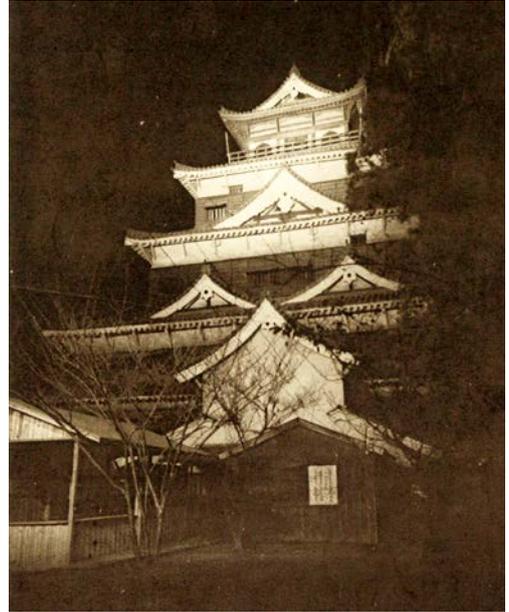
完成した広島城天守南側の入口通路。その右横には、立入禁止の竹垣が並んでいます。

■天守入口が84年前と似ていてビックリ!

そんなある日、『明治天皇行幸記念展覧会写真帖【昭和10年(1935)2月 史蹟名勝天然紀念物保存協会広島支部発行】』が寄贈され、広島城収蔵品の仲間入りとなりました。

明治27～28年(1894～95)の日清戦争時、明治天皇が、臨戦地広島で直接戦争を指導する際、広島大本営(広島城本丸上段)に滞在されました。その記念事業として、40周年にあたる昭和9年(1934)11月1日～15日まで、広島県主催で「明治天皇行幸記念展覧会」が催され、旧広

昭和9年、「明治天皇行幸記念展覧会」の会場となり、毎夜、ライトアップされた広島城天守南側とその入口通路



島大本営と広島城天守が会場となりました。この写真帖には、会場で展示されていた明治天皇地方巡幸資料、日清戦争戦利品、明治天皇遺品などの写真が説明付きで紹介されています。もちろん会場の外観写真もあり、ライトアップされた天守南側の入口が載っています。そこで天守と張り出した通路の様子が、偶然にも今とよく似ていてビックリしました。昔の人も考えることは同じなんですね。会場に入るための仮設と思われそうですが、どうやってこの通路に入るのでしょう。そこはこの写真では判りません。

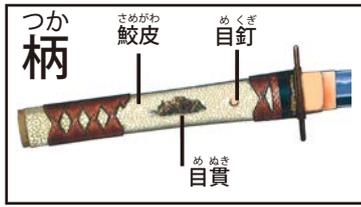
明らかに違うのは、今の天守は外観復元された鉄筋コンクリート造で、昭和9年は木造ということです。写真説明には「記念展覧会第二会場たる国宝広島城天守(閣)は毛利輝元が天正年間創建せし以来、広島城の中核として、また現存天守(閣)中最も古制を伝える一大遺構として重要なりしのみならず、中国首邑広島の一大記念塔となれり・・・」と今は無き、堂々とした現存天守の姿が記されています。当時、天守南側渡櫓の上部壁面は白く漆喰で塗られていましたが、復元ではどういふわけか茶色の下見板張りが施されています。この部分が遠目から見ると、最も新旧の違いが判りやすい箇所です。

さて、劣化した天守の処置がこれで終わったわけではありません。外壁等の補修完了時点で、通路は撤去されます。その時期は、来年度以降に耐震診断の結果を踏まえた耐震対策と併せて実施する方向で、関係部局と調整中です。今後、天守がどのように変化するか分かりませんが、みなさん、どうぞ長い目で見守っててください。

(山縣紀子)

日本刀を觀賞してみませんか パート2 (刀装具その2「目貫」)

きっと覚えている人はほぼいないと思います。”日本刀を鑑賞してみませんか パート2 (刀装具その1「鐔」【『しろうや広島城No.35』平成25年3月発行】)”に続き、今回はその2「目貫」を紹介します。

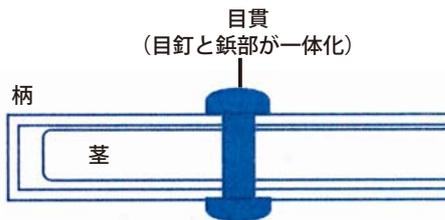


■刀の外装 (部分) ■



茎(刀身の柄に納まる部分)には必ず穴が空いています。柄の同じ位置にも穴を空けてここに「目釘」という棒状のものを差し込んで、刀身と柄を固定させました。柄から茎が飛び出したら恥ずかしいし、危なくてしょうがないですからね。本来はこの目釘だけで十分でしたが、せっかくなのでその上に飾りの鍔を付けるようになりました。そして、目釘と鍔部が一体化したものを目貫と呼ぶようになりました。目(穴)を貫いて止めるから目貫です。そして穴は「目貫穴」と呼ばれます。

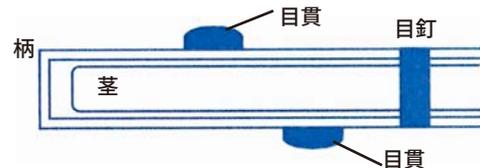
《本来の一体化した目貫》



ところが、いつしか(室町時代初め頃からといわれています)目釘と鍔部が別々になりました。独立し、自由の身になった鍔部が目貫という名の飾り金具として進化し、立派な芸術品となっていくのです。目貫は目釘のそばに、表裏一組で付くようになります。また、単なる飾りではなく、柄を握った時、手の小指や薬指がちょうどかかり、握り具合を良くする役割もあります。ですからよく見ると、表と裏では目貫の位置がずいぶん違います。右手がかかる側の目貫は鐔に近く、左手指がかかる側は柄の下の方についています。表裏同じ位置と思っていた人けっこう多いと思います。

《目釘と目貫に分かれた状態》

柄の表裏で目貫の場所が違う



目貫は、せいぜい3cmほどの大きさの中に、様々な素材と技巧を駆使して、家紋、植物、動物、人物、あるいはことわざや物語の一場面などが表現されています。もはやルーペで覗かなければ見えないほど小さなものですが、その緻密な造形には目を見張るものがあります。



兜と面頬(めんぼお)の目貫 どちらも長さはちょうど3cm

本来、小さいながらも刀の中では、おしゃれな注目ポイントだったので凝った意匠が施されました。そんなことから、にぎやかな通りのことを「目貫通り」と呼ぶようになったのです。

たいていの柄は柄巻という緒(紐)が巻かれ、目貫も柄巻で柄に固定されるため、残念ながら隠れてしまい、チラ見せ状態です。それでもなお職人さんは、自分のありったけの技術を込めました。これぞまさにクールジャパンではないでしょうか。(岡野孝子)

しろうや
!
広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成30年10月15日発行

広島城利用案内

開館時間：9:00～18:00

(12月～2月は9:00～17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

観覧料：大人370円(280円) 中学生以下無料

高校生相当・シニア(65歳以上)180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>

「しろうや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページ (<http://www.rijo-castle.jp>) からダウンロードできます